The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	〈精神障害をもつ人たちを地域で支える取り組み 「べてるの家」訪問研修報告〉まえがき
Author(s)	浜渦, 辰二
Citation	臨床哲学. 2015, 16, p. 158-161
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/51598
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

精神障害をもつ人たちを地域で支える取り組み
――「べてるの家」訪問研修報告のまえがき――

浜渦　辰二

私たち臨床哲学の研究室では、一昨年後期より日本学術振興会の実社会対応プログラム「共生社会実現をめざす地域社会及び専門家の内発的活動を強化するための学術的実践」に採択され、共同研究「ケアと支え合いの文化を地域コミュニティの内部から育てる臨床哲学の試み」に取り組んで来ている。この共同研究は、「研究１：ネットワーク型研究」と「研究２：実践プログラム型研究」の相互補完から成っているが、以下は、そのうちの前者の活動の一環として、精神障害をもつ人たちを地域で支える取り組みについて考察するなかで、有志数人たちとともに、9 月 10・11 日に、北海道浦河町にある「べてるの家」を訪問研修を行ったので、参加者それぞれの関心から報告を執筆したものである。

その際、精神障害をもつ人たちを地域で支える取り組みについての事前学習として、8 月 9 日に TEAM ぴあ (浜松) からお二人をお招きして「ケアを学習する会：精神障害のある方を地域で支える TEAM ピア [浜松] の試み」を開催したので、その記録を合わせて収録した。また、上記の「べてるの家」訪問研修の際、私は、ソーシャルワーカーの向谷地生良氏とともに「べてるの家」の活動に長く関わって来ている精神科医の川村敏明氏を 10 日の夜に浦河ひがし診療所に訪ね、単独ロングインタヴューを行ったので、その内容をご本人の許可を得て、ここに併せて収録した。

以下、参加者それぞれの観点からの訪問研修の成果については、それぞれの報告に任せることとし、ここでは、「べてるの家」訪問の計画を立てるとともに、「べてるの家」を日本における精神医療のあり方の全体図のなかでどう位置づけるかを学んだうえで訪問したほうが有意義と考え、その前提となる予備知識を学習する会から始めたので、訪問に至るまでの流れを簡単にまとめて、「まえがき」としたい。

2014 年 7 月 23 日、最初の勉強会を開き、菊竹智之さんに「べてるの家」について、杉本光衣さんに「TEAM ぴあと ACT（Assertive Community Treatment)」について、それぞれの関心のありかと問題提起をしていただき、対話を行った。その際、次のような参考文献について、参加者各自で読んでおく事とした。

1）『精神看護』7月号に、「オープンダイアローグ」の特集があり、斎藤環（精神科医）と石原孝二（東大駒場）の発表（べてるとの比較をしている）と、向谷地生良（べてるの家）を含めた対談が掲載されている。

2）『現代思想』5月号に、「精神医療のリアル」の特集があり、そこでも斎藤環が「オープンダイアローグ」について書いており、また、大熊一夫による「日本とイタリアの比較」、浅野弘毅の「精神科病院に「住む」ということ」が掲載されている。

3）大熊一夫『精神病院を捨てたイタリア　捨てない日本』（岩波書店、2010）も必読文献である。

4）対話のなかで、「ACTがどれくらい日本で普及しているのか」という質問があったが、それについては、伊藤順一郎『精神科病院を出て、町へ――ACTでつくる地域精神医療』（岩波ブックレット、2012）に地図が載っているので、それを参照しておきたい。

5）近田真美子「〈関係性〉をつくる　重度の精神障がい者の地域生活を支える看護実践から」（『現代思想』2013年8月号）。看護の立場からACTの活動を調査している近田さん（科研の共同研究仲間）の論考です。

6）石川 信義『心病める人たち―開かれた精神医療へ』（岩波新書、1990）。いち早く完全開放病棟を実現した病院長が、自らの実践の跡を振り返りながら、精神病院の縮小・廃止にむかう欧米の動向を紹介し、日本の精神医療の矛盾と進むべき道を怒りと情熱をこめて語る（アマゾン書評より）。前述の大熊一夫と一緒にイタリアなど欧米の調査に参加した精神科医の論考で、この問題についての基本文献だと思う。

続いて7月30日に、映画『人生、ここにあり！』（ジュリオ・マンフレドニア監督／イタリア／2008年）を研修参加者たちとともに鑑賞した。世界ではじめて精神科病院をなくした国、イタリアで起こった実話をもとに精神障害者の新しい「労働」の形をユーモラスに描いた作品である。その後、私は、ちょうど私たちの時宜にかなって出版された松嶋 健『プシコ ナウティカ―イタリア精神医療の人類学』（世界思想社、2014/7/4）という素晴らしい力作を読んだが、そこで紹介されている精神科医バザーリアの活動を彷彿とさせるものだった。

更に、前述のように、8月9日には、大阪大学中之島センターで、「ケアを学習する会：精神障害のある方を地域で支えるTEAMぴあ(浜松)の試み」を開催し、上久保真理子(精神保健福祉士)「あなたと私～地域でともにのびのびと――リカバリーを志向したぴあクリニックACTの実践――」、渡辺朝美(看護師)「白衣を脱いで地域に出て見えたこと感

じたこと」というお二人の話を伺った。その案内状には、次のように趣旨を記した。

先日（7月2日）の新聞で、厚生労働省の有識者検討会が、精神科病院の病床を減らして居住施設に転換する政策案について、条件付きで認めることを決めたことが報道されました。それは、病院敷地内にグループホームをつくれるようにするもので、ただし強い反対意見が出たことを踏まえ、対象を現在の入院患者に限定し、まず試行的に実施して運用状況を確認するとしたものです。振り返ると、厚生労働省はすでに「精神保健医療福祉の改革ビジョン」（2004）および「精神保健慰労福祉の更なる改革に向けて」（2009）によって、長年にわたって「社会的入院」を続けて来た精神障害者の「入院医療中心から地域生活中心へ」という基本的な方策を発表し推進してきましたが、それがなかなか進まないということで、上のような苦肉の策となった次第です。しかし、問題は、社会的入院の患者達をとにかく退院させるということよりも先に、彼らが地域生活を始められるような環境作りの方が先決のはずなのに、それを怠って来たことにあると思われます。そこで、精神障害のある方を地域で支える活動（ACT と呼ばれています）を地道に続けて来ている TEAM ぴあ（浜松）の試みについて紹介いただき、皆さんと一緒に考えたいと思います。

以上を踏まえて、9月10・11日、「べてるの家」訪問研修を行った。短時間であるが、充実した研修であった。そして10月8日には、「べてるの家」訪問報告会を行った。それをまとめたものが、以下の報告である。

なお、「べてるの家」は、以下に掲載された稲原さんの報告が考察を加えている「当事者研究」で有名だが、私自身の「当事者研究」についての考察については、拙稿「二つの「臨床哲学」が再会するとき」（木村敏・野家啓一編『臨床哲学とは何か　臨床哲学の諸相』河合文化教育研究所、2015.12.25. 所収、262-279頁）を参照いただければ、幸いである。

また、冒頭に述べたように、今回の「べてるの家」訪問研修は、共同研究の一つの柱である「研究1：ネットワーク型研究」の活動の一部であるが、この活動の他の一部として、「ケアの臨床哲学」研究会として連続シンポジウムを企画・運営しており、これまでに、「地域ケア力を考え直す～大学と地域をつなぐ～」（2014年3月2日）、「超高齢社会のなかで葬送を考える」（2014年5月31日）、「「事前指示」「リビングウィル」とは？　―人生の最終段階を考える―」（2014年6月14日）、「超高齢社会のなかで成年後見制度を

考える」（2014 年 9 月 13 日）、「超高齢社会のなかで認知症を生きる」（2015 年 2 月 28 日）を行って来ているが、これらについては、別途報告を考えている。

以下、この報告全体の目次を示しておく。

1. 杉本光衣：べてるの家における家族支援の在り方
2. 菊竹智之：未来に向かう文化
3. 川崎唯史：自分について安心して話せる場をみんなでつくる
4. 永浜明子:「老い」と向き合う――『浦河べてるの家』訪問記（2014 年 9 月 10･11 日）――
5. 稲原美苗：「当事者研究」と私の葛藤――『浦河べてるの家』訪問記――
6. ケアを学習する会「精神障害のある方を地域で支える TEAM ピア [浜松] の試み」の記録
7. 川村敏明先生へのロングインタビューの記録